

# 小田原史談

第122号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-2 1

## 報徳に於ける 分度の教え

奥津 亀吉

読売新聞の編集手帳欄に恩田木工の事跡が載っていた、恩田木工といっても耳なれない人が多いと思うが信濃の国松代藩の財政立直しに敏腕をふるった家老である。

寛保年間（一七四一—一七四四）頃というから、尊復在世が天明七年（一七八七）七月二十三日から安政三年（一八五六）十月二十日の七十年だから、尊徳より約半世紀前に仕事をされた人である。

其の業績や考え方を書いたものに「日暮硯」がある。読んだのはずいぶん前の事だったが、その内容が余りにも尊徳の仕法に似ていることに驚いたことをおぼえている。

藩政改革の理論方法など報徳の仕法と何らかの関連があるのではなからうかと思つた。

新聞の一欄に恩田木工の名が出るのをなつかしむと同時に、今の時代と何か思い返さねばならないものがある。報徳の中の分度について、今世の中で、改めて思いおこさねばならないものが多くある。

一九八五年の春を迎えて、報徳に於ける分度に就いて一寸触れてみたい。深い報徳の哲理から出発した分度論は、私に充分理解出来ないで中途半端なものになる事を恐れるが、真意を尽せない点は不肖のためである。

毎日の新聞やテレビでサラ金を借り過ぎて離婚・強盗・心中とか、暗いニュースを見る度に何故尊い人生を破滅に追いやるだけなく、享楽と虚栄に自からの分度を忘れた人間の欲望が罪もない子供まで不幸に陥し入れる事がわからないのかと哀れになる、まさに人間失格である。自己の分度を忘れた当然の結果だといふべきか。

二宮尊徳先生の孫にあたる初め北海道十勝にあって、開拓事業に従事しながら、報徳分度論を著し、救貧繁栄の道を明示しておられる指針ともいふべき分度に就いて考えてみたい。

わが報徳同志会の人達は古くからの農家であり、安定した家の経営主である。私もその一人なので其の立場で筆を進めていこう。

・分度とは

報徳分度論の中で「分度とは分に従つて度を立てつる

の意義なり。故に分は自然にして天命に属し、度は作為にして人道に属す。この自然の天分によって歳入をはかり、歳入によって歳出を節制する、之を分度を立つると云う」と説明されている。

今、国・市町村の財政も大体同じで民力に応じた税金等の収入で行政は行なはれている、一寸違ふのは不足するとすぐ借金をしてしまふことである。今日、日本の財政予算の中で国の借金利払が相当の額だと聞かす。政治貧困と言ふべきか。

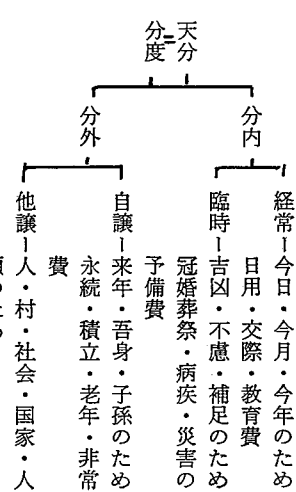
行政財政臨調で土光さんの強調される増税なき行財政構造の改革は、基本的な行いで、安易な増税を先にしないで、財政を再建する手段は、政治混乱の元凶をそのまま、責任を逃がれようとするものであり、一歩あやまると放漫政治・借金政策、その日暮らしの政治のツケを一般民衆におしつける結果になる。本末でんとうしてはならないという考え方が古くからの農家であり、改革が一歩あやまると、日本財政の破綻だけでなく政治不信を招来する。

私達の生活にも分度が失しなはれると崩壊する。報徳の分度原則として歳入の

半分を分内とし、分内を二分して一を経常経費、一を臨時費とする。歳入の半分を分外とし更に分外を二分して自譲と他譲に分ける。収入の大小によって分内と度外の率は変わってくるが、収入の一部を来年のため、子孫のための自譲分とする。永続積立や非常備蓄である。今一つは他譲分であり人のため、社会のための寄付援助貸付の類と解釈できる。こまかく解説すると尚、明

らかになるが仏教などで説く施し奉仕の心を譲るといふ形ちの分度法では、数字的に実行の方法まで説いたもので、単なる觀念論だけでなく道徳と経済の、一元一円の人間の生き方を根本とし、譲の精神をいかにして実践するかを示した、非常に進歩的・具体的なわかりやすい道である。

分度の法を約して図解すると次のようになる。



書くとき大変むずかしそうに思えるが、多し少し私達の日常生活はこの枠内にあるのではなからうか。

・貧富の定義

現在の日本は物も金も豊かだ、日本人の多くが中流意識を持って事は、有難いことだと思ふ。我が国の全生産力を、全人口で半分して水準以上を富とし、以下を貧とする考え方もあるが尊

徳は違った観点からこれを見る。

尊徳の貧富訓に於て「遊樂が分外に増し、勤苦が分内に減ずると貧賤となり、遊樂が分内に減じ勤勞が分以上になれば、おのずと富貴となる」と説示されている。

だから貧富は天にあらざる人の心にある。分度を守り収入の多いものは多いよう

に、少ないものは少いように、力に依りて不時の災難に備え、子弟の教育や繁栄のために、推譲できるものが富貴であり、大資本家や度外の蓄積推譲もせず、社会のために力を尽さず、年々の不足を生ずるものは貧賤なりと言わねばならない。今日の食を昨日の働きの食うか、明日の収入で食うかが貧富の分れる処、大小貧富は限りなく、大必ずしも富にあらざり、小必ずしも貧にあらざり、人の心構えが大切である。

譲るといふ事は大変むずかしいが、豊かな生活を永く保ち、貧しさから脱却し、空なる人生に新しい張合と充実を招来する道が、分度の実践と譲の心である事を悟るべきである。

・分度の必要性

「分度は身を立て家を保つものために設けるものにして、ひとり吾が道の本源のみにあらず。又、吾が道を行なう人のみ必要にあらず、貧富を問はず、貴賤を論ぜず皆必要の方法なり」と説いて居られる。良いい生活になりたい、充分な子供の教育をしたい、老後が幸福でありたい、其の願いは誰れしも持っている身近な切実な願ひである。それを実現する方法として、勤労と分度の道が必要

になってくる。明日食う米のためサラ金を借りれば、金のある間は豊かになるが金が終れば更に悪い状態になる事は明白の理であるそれがわかってサラ金を借りるのは、人間の弱さかも知れぬが、もしこの理がわからずに、借金や他力で人生を生きようというのは、既に緑なき衆生であり救いはない。

「腹が空いて食物を得れば満腹になり、腹一杯になれば家がほしくなり、家が出来れば道具がほしくなる一円を与えれば、十円を願ひ、十円を得れば百円を願う」。

人間の弱さといえればそれまでだが、「其の欲望は際限なく汲々として足るを知らず、生涯に満足の境地に至らず、ついに終るものは悲惨である。富むといえども、尚貧たるをまぬがれずというべきか」と嘆じられる。

仏教に「足るを知る」という教えがあるが、十の収入あれば五、百に對し五十の半で生活し、半分を次に譲る、これが教字で示す分度の平均的な基本線である。

「春夏秋冬と自然は輪廻する天の道がある、貧困極はまれれば勤儉となり、勤儉を積み富裕に至り、富裕

れば怠が生じ、驕惰に流れば貧困に帰る、是が人世の循環であり」。食富訓の教えでもある。

金持がケチとか守銭奴とか非難されることがあるが「よくあつめるものはよく散ずるもの」をよくあつめることが出来ない」。このことに原因する。

これは人間の真の生きがいが何んであるかという事と分度のほんとうの理を知らないからである。

ある人が富国安民の要訣は何んですかと問うと、尊徳は「よく積みて、よく散ずるの一事なり」と答えられている。

分度の法はよくあつめ、よく散ずる道である。最も効率良くあつめ、最も有効有益に散ずる道である。分度が確立実践される時永遠の繁栄と安定が約束され、それが尊徳生涯の仕事の成果に実証されている。

偉い人とか立派な人とかの基準は、何を根本とするか考へると、「分度を守つて徳を積み、力に依りて人のために譲る」という一事である。

億の収入のある人が百万十の月給取りが百円でも、額の多少でなく譲る事の出来る人が偉いと評価すべきである。社会的な地位や教

育や財力で、人間の価値は決定されるものでない。

藤原銀次郎といえ、大正・昭和前半の日本製紙業界に君臨した日本有数の大実業家である。財界の再建だけでなく、藤原工業大学を創建し、日本の教育発展のためその財力を投じて努力された人であり、質素な日常と譲に徹した足跡に私は深い感銘をおぼえる。

八十才の年令を超えて尚日本政財政改革のために全力投球されている土光さんが、教育のため収入の大部分を投じておられ、さすがに富を積み、そしてその使いかたを知って、実践される偉い人だと思ふ。

私の身辺にも嬉しい話題がある。昨年西栢山の日枝神社の補修工事が施工される事になり、工費は各戸の寄付金による方針である。

この計画を聞いた区内在住の二見さんが、真先にボソと一百万円を差出された「西栢山に在住して二十年になるがその間、大変御厄介になりながら何も出来ないうで申し訳けないと思つていたが、うぶすなの屋代の修築、この機会に費用の一部にしよう」との挨拶があった。

大きな事業を經營されて

いる、まだ若い方だと聞いたが、財力がなければ出来ないが、あつてもその心がなかつたら、こんな大金を公共のため寄付するなど出来ない事だと思ふ。

この尊とい浄志は工費募金の円滑な推進力として大きな力となった。私が思うに、此の事が譲の心の実践であり、二見さんが若くして事業に成功された原動力であり、此の心がある限り二見さんの事業は更に伸展するのではなからうかと。

この明るい噂は、利己的な風潮が多い世想に一派の涼風を送る快事であると同時に、「良く積み良く散ずる」、分度論の一面をそこに見いださなければならぬ。

・分度の原則

「大昔に荒地を耕し国を建つるや、其の用度天より降るにあらざり、異域より求めたるにあらざり」。

始め荒地を開墾して田畑となし五穀を作り、そのものを食しながら一部を種として、年々歳々繰返して切り開いたものである。

もし其の始め得たものを全部食し、次に譲らなかつたら、もとのもくあみで一坪の地も開けないのである。

尊徳先生は青年時代荒地に捨苗を植えて付けて一俵のみのりを収穫し、その一部

を次に残し、毎年次々と開墾して一家を再興したものは、大古開闢元始の大道であり、小を積んで大を為す原理である。

ひとり開墾の法だけに止まらず、それは分度の原理である。財を積み永安の道を数字で実行の方法を明示された、新しい生治の規範であった。

しかし分度法は、人の地位、財産、老若その他の事状に依りて取捨折衷すべきものがある。

小田藩服部家の仕法、宇津家桜町四千石の復興、福島相馬藩の治國永安の法、静岡県杉山村の再建、相模片岡村大沢家、御殿場カマド新田の小林平兵衛家、相模伊勢原加藤宗兵衛家などの仕法手段は異なるかは見えるが、分度と推譲の原則は一貫したものである。

時代は大きく変化した、特に戦後における思想・経済・産業・政治などの起伏と広がり、私達の家庭生活、人間関係まで波及している。世の中がいかに豊かになり進歩しても結局分度の法は、時代の変遷に合せて発展させつゝ、原則は一貫して不変でなければならぬ。

・度外の推譲

「勤儉を奨励して其の財を貯蓄せしむ、これを勤儉

貯蓄という・貯蓄はもとより不可でないが、其の財を蓄えるに過ぎず、分度の法は貯蓄という事の中に含くまれてはいるが、ひとり財を蓄うるにあらず、故に勤儉貯蓄と言わずして勤儉推譲という。と説いて譲の心要を強調されている。

推譲の中に子孫に譲るを自譲、他人に譲るを他譲とする。人は自譲もむずかしいが、他譲は更にむずかしい、だから貪から脱却する事も困難であり、富を永く保つ事も不可能になる。

報徳の教は儉約を専一にするというが、儉約専一でなくて、変に備えると解すべきである。この自譲によって財産を積む事は出来るが、一番大切なことはそれを他に譲ること、散ずることを知るべきである。

たとえ分度を立てて豊かになっても、度外推譲の心を失うと守銭奴に陥る危険がある。

仏教で慈、儒教で仁、キリスト教で愛を説かれていたが実行は大変むずかしい何故におこなわれにくいからという、心の持ち方にもあるが、一つには度外の財がないからである、度外の財がないという事は、分度の法が行なわれていないからである。

報徳の教は仁慈愛の心

と、譲の必要とその利を説くと共に、分度法に依って他譲の基礎財を積み実行の道を教示されている。

西郷南州が「子孫のために美田を買わず」と訓え。

司馬温公の家訓に「金を積んで子孫に遺こしても子孫はよく守らず、書を積んで子孫に遺こしても必ずよく読むものではない、陰徳冥々の中に積んで、子孫の長久をはかるのが最善の道である」とある。

これは金を積むことは益なしという事ではなくて、陰徳のない金を積むことは益なしの意味であろう。尊徳がこの理を卑近な例で説いておられる。

「培養して五穀を作れば五穀実り、培養しなければ収穫はない、土地の潤沢は即ち家の陰徳あれば子孫榮え、陰徳なければ減す。故に五穀の豊作を願わば、年々一心に耕作すべし、子孫の繁栄を願わば陰徳積善をおこなうべし」と。

この書き綴りは、大きく変化した現代に於いて余りにも古いと人はいうだろう、時代はなれの論理だと思ふだろう、而し鎌の農業が耕耘機になり、米の増産から減反に変化しても、人間生活上の分度原理は変わらない。

今、吾々がやっている報

徳同志会の報徳金は、会員の度外の資を譲る事であり此の運営によって小さいながら自分を救い、人をも救い世を聞く意味のあることを知らなければならぬ。

この小さい試みがその心と方法を種子として、時代の変遷に応じて伸展すること

を期待したい。

尊徳先生の分度論は、更に生活の深奥に迫る所論を展開されて限らないが、それに就いては、他日もう一度ふれてみたい。

現代日本の政治も、経済も、思想も大きな曲り角にある、吾々の農業の前途も多難である。報徳の教は

経済と道徳を一つのものとしての考えかたから出発する。分度の道は一人一人の幸福を願う、永遠性を追求する実践の法である事を忘れてはならない。

特に道徳や教育に於って

人の幸福は何かという原点から出発しないと、違った方向に向いてしまっておそ

れがある。目に見える枝葉

未節の現象にだけとらわれ

て、右往左往するのでは人の世は余りに儂い。過去、

現在、未来をふまえて、しっかりと大地に根をおろして生きたいものである。

史談会理事

吉崎ヨシエ提供

# 我が郷土の 我が家の年中行事

西山銚太郎

十六 二月一日

正月は昨日限りで終りである。此の日昼食時は神様仏様に御飯を供え、お灯明を上げる。昼食後おかざりを取り払い、とし神さんのおかざりからは橙をもぎとり、その場からいろりに投げこみ、それを灰の中に埋めて置いた。やけどをしな

いお祝いだと言はれた。我が家は養蚕をやったので天井が高く、野菜用コンテナの上に更にのせた踏台の上から、次の間のいろりに投げるの一寸むづかしかった。おかざりは一ヶ月以上たつてるので、いろりの煙で色は変わり、ほこりだらけになっていた。そして初午

の朝家の前で焚いた。

## 十七 節分

大豆を煎って一升折に入れ神棚に上げて置く。夕方近くになって、神棚や仏壇から家の内外、倉から物置から小屋迄「福は内、鬼は外」鬼の目をぶつぶせと唱えて豆をまく。終つて道祖神、氏神さん(天津神社)から部落の地蔵堂の方迄まきに行く。学校から帰った子供等は天津神社附近に居て「おばさん豆を呉んな。」と云って、家から持って来た紙或は布の袋に貰う。子供等は遊びながらそれを食べ、又次の人

待てる。

或身上作りの老婆は、午後になるとすぐに撒きに行

つて来る。此の頃はまだ子

供等は学校からは帰ってな

い。入学前の子供だけでは

天津神社迄は行けないから

豆を呉れてやらないで済む

財産作りの人は考えたもの

だ。豆撒きに男は忙しいか

ら、大体女の人が多く行

つた。

夜になると家族全員集ま

つて、大豆を年の数程食べ

る。子供等は自分の年を何

回も教えながら食べたが、

大人になるとやっと一度だ

け、おばあさん六十だよ

等と云はれてもやっと数粒

だけだ。時には「ハイ、十

二十、三十……ハイ六十食

べたよ。」等と云って、「

アツ、ずるいよ。」等と笑

はれたりもした。

此の豆は初雷さんが鳴

った時に雷除けに食べるの

と云って、茶ダンスの引き

出しに入れて置いた。又石

臼でひいてきな粉を作った

りもした。

友人を誘って大山の不動

尊や道了尊へ豆撒きに行く

者もあった。

十八 初午

節分後の午の日即ち初午

にお稲荷さんのお祭りをし

た。赤飯をたき、一握りの

わらの中間を束ね、片方を

二つに分けて束ねた処から折って他の方へ持って行き又束ねる。その先を鉄で切つてきれいにする。そのわらの中をや、舟ぞこ型にすぼめて赤飯を盛り、油揚げやめざしをのせてお稲荷さん

に上げる。我が家では石川政春氏方裏にある稲荷さんの上にいく。何故か知らないが昔からそうして来、又そうする様に語り継がれて来た。又天津神社境内に「丸山の稲荷さん」が祭られてると云って、天津神社へも上げに行く。

初午には、当番の家で稲荷講が行はれた。夕方から赤飯をたいの御馳走が出た。大人も子供も集まった。大正の始め頃、私は父だか

祖父だかはっきりしないが隣の家に連れられて行った記憶が臆気に残ってる。随ってその直後あたりにこの「講」はつぶれてしまったらしい。二月十一日は明治時代から紀元節で休日だったので、二月十一日に稲荷講やお稲荷さんのお祭りをする様に、決めてた部落もあった。

十九日 目一つ小僧

前年の十二月八日、各家庭を廻って作った帳面を、目一つ小僧は道祖神へ預けて置いた。処が道祖神では一月十四日のさいとう払いでその帳面もやけてしまった。そこで目一つ小僧は又二月八日各家を廻る。

二月八日の夜下駄を表に出して置くと、目一つ小僧がハンコを押してしまおうので、忘れないで履物は必ず家の中に入れる。又目一つ小僧を屋敷内に入れさせない為めに、「目」の沢山あるもの即ち竹で編んだ目籠を長い竿の上のせて立て置へ。門口に柵の木を植えて置く。柵の葉が地上に落ちてとげが上向きになると、裸足の目一つ小僧はこれを踏むと足が痛いので入って来る事が出来ない我が家の入口には家から見て左側に大きい柵があるのて安心だと思った。此の日夕飯には一握りの

大豆を入れた。此の附近の家庭では大正十二年九月の大震災以前は麦飯を食べてた。それが此の日は麦を入れない飯だった。

此の頃は、子供が夜何時迄も起きてると目一つ小僧が来るぞ。」と云はれた。子供は、そんな事は嘘だと知りながら「ワアおっかない」と云って尚騒いだ。

二〇 ひな祭り

三月三日はひな祭り。その為めに二月二十八日、又は潤年には三月一日にもちをついだ。潤年の二十九日又は平年の三月一日は二十八日の次で二十九日になるので、この日はもちつきは必ず避けた。人が死んだ場合七回忌迄は新仏でこの間はもちをつかない。七々忌又は五七忌に四十九もちをつくの九日もちと云って九日・十九・二十九日にもちをつくのを忌んだ。

もちは何も入れない白いのと、紅とよもぎを入れた三色のものをついた。この三色のもちで菱もちを、又これ等を小さくきってよく乾燥して煎り、砂糖をくるんであられを作った。米麴を買って来て甘酒を作り、白酒にして菱もち、あられと共におひなさんに上げた。ひな祭りは足柄上郡は四月、足柄下郡は三月に行は

れた。私の母の実家は上曾我だったので、三月二日の午後もちを持って呼び使いにいった。従兄がよく一しよに来て泊った。四月上曾我のひな祭りは、やはり前日の二日に迎えに来たので一しよに行つて泊った。四月三日は神武天皇祭で祭日だから学校も当然休みだった。随つて、大抵二晩泊り四日の朝弁当を貰つて学校(千代小学校)へ行った。

此の三月三日には小学生は兵隊ゴッコをして、山へ行くのが例になっていた。紅白に別れて、最上級生が夫々の大将で、以下一学年一階級づつ下げて肩章をつけた刀を作り、ピストルを買つて来て紙雷管を使用し、パチパチやりながら裏の曾我山の頂上浅間山迄も行った三日が土曜日から日曜日までければ近くで終つてしまつた。

女の子は重箱に煮メやすしを詰めて、氏神さん天津神社の上あたり海の見える畑で、おひなさんをかざり友達とお客に招いたり招かれたりして遊んだ。

二一 地神講

暦を見ると、春秋の彼岸に最も近い前の戌の日に、社日と書いてある。社日には地神さんを祭る地神講があった。此の日は地中深く掘つたり、鍬等を

使うのは極力避けた方がいゝと云はれた。部落中が農家だった頃は全部落で地神講を開いた。当番の家では各家庭から米五合宛を集めて準備する。床の間に地神さんの掛軸をかけ、夕食に集まつた仲間にお膳は大テーブル等と云う略式のものではなく、一人々々木製の正規の椀と膳が使用された。赤飯・煮メ・煮魚・油揚・ゆずら豆・香のもの等を出し、勿論地神さんにも上げる、各家庭でも赤飯を作つた。

我が部落では今でも此の地神講は続けられてるが、戦後何時の頃からか銘々膳から大テーブルになり、食器も総て陶器が使はれる様になった。そしてこれは夕食だけのものだったが、或家で酒を出して御飯をなかなか出さない。仕方がないからのみながら話してる。夜も九時頃になってやつと御飯を出したので、前の家で酒を出して次の家では出さない訳にいかず、今ではこれが例になってしまったやがて酒だけでは済まないで、ビール、ジュース等も加えられる様になった。

二二 庚申

千支の「かのえさる」は六十日目に廻つて来る。此の日お庚申は夜食迄である夕食が終ると雑談となり、

夜更けて夜食となる。随つて、何か公職のある者は、夕食を終つて会議に行き、終つて来てからで十分夜食の間にあった。此の間が雑談である。よく余り話のはづむと、「話はお庚申の晩にしるよ。」等と云つたものだ。

地神さんは神様だからお産のあるのはかまはないが葬式のあつた家は一回休むお庚申さんは働き者だから葬式は構はないが、子供は働くじやまになるからきらいだと云はれ、お産や流産があつた家は一回休む。地神講もお庚申の講も強制ではなく、入脱退は自由だが、田舎で娯楽の少なかつた頃は夫々に想定の案しとなり、必要の条件を満たして来たが、純農が減り時代が變つて来ると脱退者が多くなつて、地神さんの方は七人となつた。七人でも年二回だから三年半目に番が来る。お庚申の方は、

年六回だから十八人でも三年に一回の当番となる。それで遂次人員は減り六人となり、年一回は当番をする様になってしまった。年一回の当番は大変なので、何時相談したともなく、適当に怠けて年三、四回だけ行はれる様になった。そんな処へ年寄が亡くなつた、主が死んだ等で遂に四人になつてしまった。も早講として今迄の様な方法では運営不可能になつた。

丁度此の頃、部落の月例の念仏と地藏堂の供養の念仏を一しよにして、毎月二十三日に地藏堂で行う様になった。そこで残つた四人で相談して、お庚申の掛軸は地藏堂へ預け、時には二十三日の念仏の時にこれを掛けて供養する様になった前記四人の者が番をきめて何か特別に簡単な物を一品供える様になり今日に及んで居る。

東海道五十三次の旅

下川茂三郎

本年は小田原史談会誕生三十周年に当る、その記念事業として、東海道五十三次の中野会長の試案を頂き街道

次の全宿場の史跡めぐりを何回かに分けて行なうかと

の風物誌、弥次さん喜太さんの膝栗毛、広重浮世絵など思い合せ、現世との移り変りを比較する、絶好の期会であると、楽しい魅力を感じこの記事を綴って見ました。

古代道は仏教伝来の飛鳥文化の成立と共に発達し、大化二年(六四七)、大宝律令(七〇一)の厩牧令諸置駅条の駅馬数は、「大略」

「山陽道廿疋・「中路」東山・東海道十疋・「小路」北陸・山陰・南海・西海の四道五疋と、郡毎に五疋の伝馬を置く、駅家は通常三〇里(約十六料)・十五里

間隔に、駅戸や駅長駅子の名称と、その管理は中央では兵部省兵馬司、地方では国司で、天平六年(七三四)

(の駅馬帳・駅家鋪設帳・伝馬帳・駅起稲出挙帳など作成して太政官に送付状況の史資料があるが、その後伝馬の制は海運との密接な関係に於て、廃され復され

盛衰したようである。日本列島本州中央部の大平洋に面した地域を、東西に貫通する幹線道として、東海道が開かれたのは九世紀頃で、以降撰政時代の藤原文化と地方発達時代を経て、鎌倉幕府の文化時代になると、朝廷所在地鎌倉と

りは重要となり、街道の宿駅は次第に発達するようになった。その後、足利室町・東山文化を経て桃山時代の小田原城落城と共に、百余年に亘る戦国時代は終り。秀吉の命によって徳川家康は天正十八年(一五九〇)八月一日江戸城に入り居城とした。慶長五年(一六〇〇)九月、関ヶ原の戦いに大勝した家康は、同八年二月征夷大将軍に任ぜられて江戸幕府を開き、全国の支配政治は再び東国の江戸に移り、本拠地となった。慶長八年には西の朝廷所在地の京都・生産都市大阪と、東の政治首府・消費都市である、江戸とを連絡するもつとも重要な東海道を初め、鎌倉時代道・小田原北条氏関東征覇道を含めて幕府保全体制の五街道を制定した。東海道と更にその裏道とも言うべき、中仙道・奥州・甲州・日光の五道の総称で、中仙道は正徳六年(一七一六)頃から中山道と書いた、もちろん五街道以外にも、大阪を起点とする中国路のごとき重要な道も存在したが数に入れず、あくまでも政治中心な重要道路制定をし、道中奉行を置き東海道は重要な幹線道で

あるから、幕府の直轄地以外には、子飼いの譜代大名を配置した、また江戸日本橋を起点に京都を終点とし品川を第一宿として五十三駅の大津まで宿駅を定め、家康は慶長九年二月大久保長安らに命じ、街道巾を五間とし路傍に松を植え、一里塚を設け榎を植え旅人の慰安と里程の目標とし、江戸より一三三里(四九二町)・京都加茂川三条大橋までの街道は一段と整備された。交通路としての特徴はなんとといっても公用路であり江戸に近い箱根宿には江戸警備の目的で関所が置かれ中間地点の荒井宿(浜松)にも政治的な目的で関所を設け、地方の脇往還道にも関所を配置した。初めは軍事上、やがては治安警察の役割も果し、「入り鉄砲に出女」の言葉が生れた。寛永十二年(一六三五)以来、参勤交代の制度化がされ、大名が隔年に江戸へ出て、徳川将軍へ帰順の挨拶をする。更に徳川将軍の廟所へ参拝する京都の公卿一行、御馬献上のような幕府・朝廷間の公式儀礼、徳川将軍の交代ときの、オランダ商館や朝鮮の使節達の表敬挨拶の往来など。勿論利用者は武士・貴族階級の

り頭、既に十七世紀終り頃の江戸は、百万人近い人口になり、消費都市に発展し、商業と生産の流通経済が拡大し、商人や商品の動きも頻繁になり交通量も増大し、街道筋の名所や名産情報は一般庶民のもとにもたらし、京都大阪人は江戸の繁昌を見る江戸見物一方江戸庶民は古都や商都に遊ぶ京都、大阪見物が盛んとなり、一般庶民も有名な寺院や神社に巡礼・参拝に名を借り、団体にて物見遊山の流行となり、従って宿ごとの宿泊施設、旅人や荷物の輸送に供される、人夫と馬の常備、又、道路保全の制度が整備され、公用旅行者の便宜が優先するを建前で、東海道を往來する公用団体は、先ず百人から数千人にも及ぶ、大名行列の往来である。街道を旅する一般の人々にとつて、当時の東海道は必ずしも安全で楽な道でなかった、夜の旅は危険であったので、宿を早朝四時頃出て、日中三十料から四十料米程歩き、晩までに次の宿駅に入るのが通例であった。東海道を横切る大きな河川は橋はかけておらず、舟に乗るか、人夫の助けを借りるか、徒歩で渡るのであった、もし雨期のため増水でもすれば、何日も足留

をされ、旅人達は或る時は地方の名産や名所を楽しみ或る時は難所に苦しみながらも、大体十二日から十四日位で東海道を歩きとおした。浮世絵師広重について天保三年(一八三三)九月、安藤広重三十六才の時徳川幕府が朝廷へ駿馬八羽の御馬献上の行列に加わって、東海道を京都へと旅行了した。これはかねてから東海道五十三次を題材とした、街道風景の統繪出版を企画していた、版元の保永堂にとつて、願ってもない機会だった。旅行中多さんのスケッチを作り、構想をいだいて江戸へ帰った広重は、翌年から東海道五十三次絵を順次描き続けるが、この保永堂(竹内孫八)は独力で刊行することが出来ず、当時一流の版元徳鶴堂(鶴屋喜右衛門)に助力を依頼した。広重と保永堂・徳鶴堂の合作シリーズは、天保五年正月、統繪五十五枚を一揃として、序文をつけて保永堂から発売された。この一作が保永堂一流の版元に押しあげたと、同時に一躍浮世絵風景画の第一人者の大評判を受けた、その要因は出版が極めてよいタイミング時であった。既に元禄三年(一六九〇

)浮世絵師菱川師宣が旅行者用の東海道絵地図が出版され、街道の風物に対する庶民の関心が高まって来ていた、ついで享和二年(一八〇二)には、十返舎一九の小説「東海道中膝栗毛」の初篇が刊行され空前の売行きをみせた。これは京都・大阪見物に出掛けた、二人の江戸っ子が東海道の道中で出合う、事件や失敗の数々を滑稽に綴った読物で、次々と版を重ねたベストセラーである。更に当時人気の浮世絵師葛飾北斎が、東海道を題材とした三々四種類の統繪を発表していたことも、街道風景の浮世絵版画を、統物として鑑賞する素質を庶民の間に作りあげていた。こうした絶好の時節に若手浮世絵師広重を起用した版元保永堂は見事に的中した。特色として、各図の風景はいかにも実景のように見えて、必ずしも全てがそうでない点。明治以降の近代化や、地勢の変化を考慮に入れても、今日それらしい場所を見出すことは出来ない。画家の心の中で組み立てた風景画という事が出来る。季節や時刻の変化が巧みに取り入れられ、見る者に季節感と深い旅情を感じさせる、日本の風土独特の季

節感に深く留意して作られている、そして旅情を誘う画面が随所に描かれている時刻と宿駅がうまく連なっている、美しくさを愛する日本人の感受性にもとづいた構成であり、広重が案出の描き方が庶民の心を引きつけたものである。

道中画三十五図の御油宿の旅館の玄閣壁に右から、「東海道続絵」「彫工治郎兵衛」「摺師平兵衛」「一立斎(広重の画号)」とありこの一図がなければどんな名作を作ろうとも、彫師・摺師の名は永久に知られなかったであろう。

三人の息のあった古稀に見る傑作で素晴らしい貴重な作品である

東海道を旅する魅力と

時代の移り変った名勝史跡を訪ねる楽しさ、旅を愛される皆さんの静かな集りでも中野会長の流調な説明もあり、荷物にならない土産として、健康体力作りの一端ともなります。

東海道五十三次の旅には多数の旅友のご参加を願いつつ、新会員ご加入の募り推進資料として記しました。

参考文献  
東海道五十三次  
秋田書店  
MOA美術館  
日本史年表  
吉川弘文館  
歴史研究  
人物往来社

# 自叙伝

寿昌寺住職  
全理事長  
荻窪保育園長

## 大井 諦玄

### 第七章 後教職時代

後教職時代は、昭和十四年十月十一日より昭和二十年八月四日迄五年十ヶ月間即ち召集解除になってより第二回応召までである。

昭和十六年三月廿一日自修学校退職翌四月一日湖北中

学校教諭となる。

昭和十八年四月一日芦子在郷軍人分会長に推選されるこれが私の一生の一大異変の因縁となったわけ、後述あり

昭和十九年十一月十日一等教師拜命、これで最後尾

より二番目の教師分眼  
昭和十九年夏会初会結成  
修業戦時中物資不十分極間  
単に修業西堂には本寺斎藤大老師、これで大和尚と云うわけ  
変に応じ時に応じて漢詩

#### 梅花

芙蓉第一梅。  
今夜為君開。  
欲識花真意。  
三更踏月來。

#### 早秋海浜

洋洋風浪水連空。  
早雁驚秋半月弓。  
自入無為亡倦網。  
美哉光月是神工。

#### 元旦偶吟

春風滿面祝新豐。  
四十余年西又東。  
五障消得雲既散。  
人間一夢玉玲瓏。

#### 元旦賦

朝課既罷醇芳醇。  
喜客歌吹自有真。  
世路羊腸吾情切。  
壽昌山裡百福臻。

#### 苦熱

心猿有息不書續。  
担馬無声汗又繁。

ものにした、笑覽せられたし、昔から詩を作るより田をつくれとか、仲々その余裕はない、詩は志なりと云うが私は詩は絵なり、画面を選ぶか要中の要

#### 梅花

芙蓉第一の梅  
今夜君が為に開く  
花の真意を識らんと欲すれば  
三更に月を踏みて来れ。

#### 洋々たる風浪水空に連る

早雁秋を驚かす半月の弓  
自ら無為に入り俺が網を亡う  
美なるかな光月是れ神工

#### 春風滿面新豊を祝す

四十余年西又東  
五障消得す雲既に散す  
人間の一夢玉玲瓏

#### 朝課既に罷り芳醇に酔う

喜客歌吹す自ら真有り  
世路羊腸吾が情切なり  
壽昌山裡百福臻る

#### 心猿有息有り書續せず

担馬声無く汗又繁し

世上皆談三熱苦。世上皆談三熱の苦  
何知三熱到山門。何ぞ知らん三熱山門に到るを

#### 元旦

四海昇平乙己年。  
三更諷誦鏡鐘伝。  
課終対酒何榮幸。  
現瑞残星尚在天。  
註乙己木の弟已

#### 秋日郊行

携書出郭氣尤清。  
寂々寒砧雜笛声。  
万里長空人不見。  
疎鐘一杵此相迎。

#### 秋日郊行

書を携えて郭を出ず氣尤も清し  
寂々たる寒砧雜笛の聲  
万里長空人見へず  
疎鐘一杵此れ相迎り

### 第八章 第二回心召

昭和二十年八月四日臨時召集のため東部六十三部隊に入隊同年同月十二日独立歩兵第七百十二部隊に転属不肖四十二才  
八月三日出征、市方神社に拜礼、武運長久を祈る、然し一航は神社にて解散、

敵機敵弾頻なり、頗る危険自治会長のみ送る。  
甲府へ到るや焼土と化し一戸もなし、七百十二部隊は、市内の学校、小銃は七人に一銃、食器は竹筒、湿気が無ければ割れて用をなさず、湿気があれば悪臭、全く処置なし、食事は想像にまかす

官等	八月十二日	数	八月十四日	備考
中尉		一		
見習士官		三		
曹長		一		
軍曹(大井)		一		
伍長		三		
兵長		一		
上等兵		三		
一等兵		三		
二等兵		二		
計		十八名		十八名

昭和二十年八月廿九日復員除隊  
昭和二十二年十一月二十六日戦犯により湖北中学校退職す。

第九章

行商露天商時代

芦子在郷分会長は自ら進んで得た職ではない、在郷軍人人数が数度に亘り来訪止なく分会長となった、戦犯退職ともなれば担家は僅か二十一寺有財産二町歩は農地解放、唯一の生活費は薄給ではあるが給料であるそれが全く零になる、然も子供十四才を頭に五人、自分分は曲りなりに、最高学府を出て居る、何も大学を出たからと云うて決して偉いわけでは無い、教育のある立派な人でも悪事を働いて警察のお世話になって居る人が沢山居る、教育を余り受けない人でも、社会的精神的に立派な方が、沢山の、立派な人は教育の有無でない、心のおき処である、然し教育するは親の義務である、人生の土台は親が築いてやるべきだ、大人になつてから進むべき方向精神的訓練は各自の自覚にあると確信して居る、そこへ、戦犯、離職、解放、どうしよう、色々考へた、現在長い戦争で物資は不足、配給では全く生活が出来ない、栄養失調になる、病気になる、月給取りの妻君が家族が食う為に、農家を訪れて米、野菜、その他食べ物の物なら何んでも求めねば

ならない、而も高値、普通の二倍三倍の値段、サラリ一の妻君無制限に金があるわけではなし嫁入りした時の着物、帯等風呂敷に包んで食糧と交換する、生きる為なら仕方なしと云うところ、所謂闇取引、他人事ではない、我が事、子供五人のことを思うと、今何んとかせねばならない、今迄は担務仕事には上座に坐つて一応方丈様で通つて来た、さて今日からは、どうしよう。

聞いた、さもなりなん、昨日迄は、先生々々と呼ばれた身が、今日は百八十度転換人の門に立つて「今日は、「これ買って頂戴」と頭を下げる、これを思へば涙の出るのも無理もない。第一日目、第一番目田中源太郎氏を訪れた、氏も中おばさんも涙を流して、心地よく二、三点買つて呉れた、今でも悩みに悩み込んでいる、有り難いことだ、行商が毎日／＼続いた、度々行くこと安くなつて、お茶を入れ雑談に花を咲かせた、大磯から借りた品物では間に合はないやうになつた、小田原の春日で古物の市が催されて居る。

農家は雨の日は家に居る、私の稼ぎ時、日がたつにつれ段々商売は上手になる、五供五人と妻が口をあけて待っている。教育費を捻出せねばならない、大磯平塚は勿論沼津三嶋の市へも行った、小田原より沼津三嶋が安かつた、と云うことは三嶋沼津の方が品物が沢山夜つれ／＼なるまゝに一詩あり

出るから。人間は昨日の生活は、今日の土台となり、今日の生活は明日の土台となる、教員生活は古物商の土台となつた、そこに同情がある、毎日々々孤立して居ない、基盤の目の様に連絡があることが、確に理解出来た。

方、経営は仲々困難、戦終当時は、何んでも買つて呉れたが、行商も行詰りの一途、止むなく小田原大工町へ露店を出すことに決意した、綿亀の加藤さんには大層御世話になつた、それでも一日千円位の利益をあげることが出来た、朝早く綿亀さんに置かして貰つたソート台等の準備をし、衣料並べ、即席の商店開設、夕日斜陽ならとする頃今日一日の終止符、相当疲れる殊に困つた事は小便に一苦労、内密であたりで失礼したものだ、時に農家の人が馬力で大小便を揚げに来る馬をつなぐ、馬は遠慮なく大小便をする、それも、大量小さな山と川、悪臭、蠅が集つて来るには閉口した馬力が去つた後でも蠅は残留いつ迄も居る、この蠅は人を刺す、いたいには、いささか弱つた。

或る日のこと、私の教え児で朝鮮人だが足悪い二十才位の青年が現れて、ズボンと二本、上衣を一着買つて呉れたは有難いが代金は明日必ず持つて来るから貸して貰いたい、現在寺町の何番地に居ると云うて氏名迄書いたのを私に渡した、教え児であることは思い出すと記憶にある、私は承知した。

聞くところによると、一人で二職は法律上出来ないそうだが、私は僧侶なる故他の職業は出来ない、幸大磯に私の姉に当たる夫小宮春吉が質屋を経営して居る、或る時尋ねて相談したら芳子(私の妻)に古物の許可証を取得させて君がその使用人になればよいと答へた。

私は帰家して相談し家内も諒解して早速手続をし許可証を獲得した。品物は古宮質店から借りてどうやら行商の荷物が出来た。或る日、雨はしほ／＼降る、背に衣類を負うて傘をさし女房に「では行つてくるぞ」と云うた時妻は「いっていらっしやい」妻の顔を見た、涙を流して

春日にはよく出掛けた、一日行くと売りさばく三日もかゝる、市は大磯、二の宮、平塚、三嶋、沼津等あつた、それぞれの場所であつた、それだけの場所であつた、出来るだけ安く買つて、安く売らねばならない、大井さんの品は、よくて安いと云う評判が、出ればしめたもの、雨の日も風の日も、年中無休、殊に

為商説法 暫到水雲逢大仏。 暫到水雲逢大仏に逢う 参他拈得火中蓮。 他に参じ拈得す火中の蓮 為商説法閑々地。 商となり法を説く閑々の地 飯了従容焼白梅。 飯し了り従容として白梅を焚く 註暫到ししばらくの間寺に滞在し修行し去つて行く僧 水雲し雲水とも云う居住定らず修行する僧 大仏し大仙人の略で仏の敬称 拈得しとら得る、会得する 白梅し香木の名

初冬偶成 忽忙刈稻欲斜陽。 忽忙稲を刈り斜陽ならと欲す 卯女炊烟野趣長。 卯女炊烟野趣長し 対月烹茶如雀舌。 月に対し茶を烹る雀舌の如し 柴門木葉常繁霜。 柴門木葉繁霜を常ぶ 註卯女し卯は村と同じ 昭和二十三年本師大雲和尚法弟恩師竜跳師遷化同年十二月八日瑞雲寺兼務住職任命さる 昭和二十六年寿昌寺再會首座は大俊堂頭和尚上堂す 古物商は日が立つにつれ 物質は出廻り価格は下る一

此の男、教え児、明日に

「いっていらっしやい」

此の男、教え児、明日に

此の男、教え児、明日に

此の男、教え児、明日に

此の男、教え児、明日に

此の男、教え児、明日に

なつても明後日にも姿を見せない、十日たつて、遂に数千円流れたかたち、元も子もない、私は同情を求めつつも、私には無いが、露店をするいささつを話したが何んの好果は無かつた、これが社会の一面であると思つた。

当時一般社会経済状態はよいとは云はれない、相当貸り売りが生ずる、貸しを拒絶すると商売にならない手帳に書いて居るが付け落ちもある、商売は容易で無いことをつくづく感じた。

某氏(特に名を秘す)などは沢山買つて呉れたがホチ(貸し売りを云う)ホチの連続、前の貸しを何んとかして取りたい一心から今日も亦入れる、入れなければ、全部御破散、今日ホチ三十年の今日道で会つても一言も言はない、之が社会の一面かと、いやな勉強をさせられたものだ。

五人の子供を育て、学資を生み出すには、容易なものではなかつた、特に長男の大俊、次男の謙三の二人が、共に中央大学の経済学生、当時古物商の私の力では不可能だつた、今名古屋に居る竜章は高等学校、長女久江は今夫婦でロンドンでダンスの研修についているが中学生、次女は小学生(今は国立の音楽学校四

年卒業してピアノ及び声学を教えている)以上五人、よく働いたものだと感心する、それも昔教員生活をした賜、分會長をした賜と思つた。

人は只一人では生きられない、多くの人や物にささえられて、生かされて居るこれに報ゆる只一つの道は不得寒厨之八珍。祥雲啓瑞最精淳。松迎梅笑新開曆。栢酒無我祝吉辰。

又新春を迎うるに当り旧友に平素の疎音を謝し一詩を賦す

謹迎新春斗当甲。平素疎音蓋不瞋。貴殿多住心に象。俺為葦草不憂貧。

細川石屋老師は天下の豪、遷化の計に接し一偈を賦し以申す

説来説去起風濤。説き来り説き去つて風濤を起す。領得乾坤天下豪。乾坤を領得す天下の豪。忽入涅槃何有滅。忽に涅槃に入る何ぞ滅有らん。杜鵑慟哭轉蕭騷。杜鵑慟哭すうた、蕭騷

註説来説去縦横無尽に法(仏法)を説く

領得乾坤天地自然の道を覚り得て

涅槃印度語で貪(むさぼる)瞋(いかる)痴(ぐち)の三毒の煩惱の火を吹き消すことで又は煩惱の火が吹き消された状態を云う

涅槃には有余涅槃と無余涅槃がある。

有余涅槃三毒がすっかり吹き消された清静無垢の身のみある状態

無余涅槃三毒も汚れた此身も無くなった状態で他界して尚又衆生を得脱する故に化を遷すと云う即ち遷化で僧侶の死亡したことを遷化とも涅槃とも云う

人を生かし、物を生かすに あると 生かされて居るが、報ゆる日は、いつだろうか

当時私は生かされている毎日、恥かしい限り、年頭に当つても八珍に乏しい寒厨、然し祥雲啓瑞、新曆を迎うる一詩

寒厨を碍げず八珍に乏し 祥雲瑞を啓く最も精淳 松は迎へ梅笑う新に曆を開く 栢酒無我吉辰を祝う

毎日の行商或は露天商容易でない、その無理が原因か、いや左に非ず自分の不節制、胃を病い、食事をする暫くすると痛む、空腹になると痛む、胃の薬は色々飲んだが一向に治らない、段々悪くなる一方、医師へ行く時間が欲しい、追々悪くなる、身は疲れる、瘦せる家内や子供が、医者に診察を受くるやう進める、古物商も品物が出廻る、身の健康もこの辺が限界だと自ら知るやうになつた、乳幼児の保育の方向に視線を向け、家内に相談した、取り敢くず世話人会議を開き、本堂を利用して保育園を開くべく要請した、世話人之を諒承した。

昭和三十年四月一日より寿昌寺本堂を利用して荻窪保育園を開設することに決定す時に私世寿五十四才

第十章

福祉事業時代

行商、露天商は、身心共に疲れ、ピリオドを打つことにした、そして荻窪保育園創設、本堂利用実施、当時職員は昭和三十年四月一日。

園長兼保夫 大井 謙玄  
保母兼事務 大井 芳子  
保母昭和二九、八、十七  
保母資格取得

瀬戸ミチ子 立、亜鉛膏を建立  
昭和三十一年三月七日荻窪保育園々舎として荻窪五四二ノ五番地に床面積二一、九八平方米、木造平屋

当時保育園職員左の通り

小田原市荻窪五四六 園長 大井 謙玄  
保母 大井 芳子  
蓮正寺三〇三 瀬戸ミチ子  
荻窪五四三 吉本 房江  
久野二二七 調理婦 府川 ハマ  
久野二二七 園医 窪倉 精一

昭和三十三年四月一日より園児に十時のおやつ、中食の副食、三時のおやつの給食をする、カラー、營養の計算、出欠席計算、其の他経理の計算、仲々大変園長と大井先生が担当、毎日事務室に詰めきり、乳幼児の和か顔を見る、疲れもどこえやら、心身共に快々昭和三十四年五月二十二日小田原高等学校長より感謝状を受く。

昭和三十五年十二月五日 正教師拜命

偶 吟

低辞管買本来円。 辞を低うし買を管む本来円なり  
世路羊腸五十年。 世路羊腸五十年  
諦視玄玄風竹響。 玄々を諦視し風竹の響  
西来祖道仏光鮮。 西来の祖道仏光鮮なり

註實—ここではコト音ず商売の意、力はあたい

本来円円満無垢にして和かな生活

諦視玄玄 奥深き仏道の究極を諦め視る

西来祖道 達摩大師が印度から支那へ伝えた仏道

◎編集部よりお願い：：  
お蔭様で会報も百二十二号を出す事が出来ました。今後も続けたいので原稿を是非お送り下さいます様お願い申し上げます。 杉崎